

研究者「植野達郎」と教育者・植野先生

稲垣 伸一

私にとって「植野達郎」(敬称略で失礼します) と言えば、まずトマス・ピンチョン『重力の虹』の共訳者だ。翻訳の刊行は1993年。私自身は修士課程を出たばかりで、頭を抱えながら当時19世紀アメリカ作家とりわけヘンリー・ジェイムズの作品と格闘したりしていたのだが、世はポストモダン作家大流行の時代。ピンチョンを読んで何か語ることができたらカッコいいよな、とミーハーな思いも手伝い、無精な私は原書を脇に置きつつも共訳者「植野達郎」の翻訳を手にとったのだった。

それから10数年後、私は最初の本務校から移って実践女子大学文学部英文学科でお世話になることとなり、その時の学科主任が植野先生だった。修士課程を出たばかりの頃、翻訳を通してピンチョン作品を味わうことでお世話になり、その後、専任教員として採用された学科の主任が、まさかの植野先生だったわけだ。そして、植野先生ご退職の今年度、今度は自分が英文学科主任としてこの文章を書いているというまさかまさかの展開。人との縁というのは予想がつかないもので面白いものだとつくづく思う。

正直に書くと、実践女子大学に採用されるまでは、「植野達郎」と言う『重力の虹』の共訳者としてしか存じ上げなかったのだが、同僚となり先生のお仕事を拝見すると、改めて申し上げるまでもなく、植野先生はじっくりとテキストに向き合うフォークナリアンなのだということがすぐに理解できた。そう考えると、日本語訳がなかった*The Gravity's of Rainbow*の共訳者の一人に植野先生が名を連ねているのもわかるような気がする。つまり、テキストを読む真摯な姿勢が土台となって翻訳のお仕事を支えているという意味で、フォークナー作品を始めとする難解なテキストに対峙してきた延長上に『重力の虹』刊行があったということだ。原作*The Gravity's of Rainbow*刊行が1973年だから、日本語訳が出るまでに20年の歳月を要したことになる。今では他の訳も出ているが、この作品の翻訳といった

ら久しく1993年版しかなかった。冒頭に述べたように、その本邦初の*The Gravity's of Rainbow* 日本語訳に怠惰な私などは大いに恩恵を受けたというわけである。

植野先生にはもう一つ翻訳の重要なお仕事がある。それはネラ・ラーセン『白い黒人』(原題 *Passing*, 1929)の刊行だ。「訳者あとがき」によれば、「パッシング」という言葉が日本人読者に馴染みがないだろうと考え、このような翻訳タイトルとしたらしい。英米文学の研究者には知られていたこの言葉を、翻訳刊行により一般読者にも伝える役割を、このお仕事は果たしたのではないだろうか。こうした意義に加え、同書には植野先生の教育者としてのもう一つの側面を垣間見ることができる。それはこの翻訳が、本学英文学科の卒業生と始めた読書会の活動が元となりその成果が結実したということである。このことは、翻訳『白い黒人』とは研究者「植野達郎」と教育者である植野達郎先生のキャリアが一体となった結果、生まれた成果だったことを示している。

教育者としての側面に触れたところで、植野先生の教師として、そして役職者として果たされた大学でのお仕事にも言及しておきたい。

植野先生は実践女子大学で特に2001年からの約10年間いくつもの役職に就かれた。まずは2001年から務められたのが国際交流センター長である。私は当時、この大学にまだ着任していなかったが、想像するにこの時はまだ本学における国際交流の歴史が始まって間もない頃だったのだろう。そんな時代に植野先生はセンター長としてカナダ、フレーザーバレー大学との関係を構築し始め、それが現在の夏季休業中の短期語学留学プログラムと長期の交換留学制度につながっている。本学では現在このフレーザーバレー大学を含め、海外4大学と交換留学協定を結んでいるが、こうした充実した国際交流の礎を築いた時期が、植野先生の国際交流センター長時代だったのではないだろうか。

そして2003年から4年間英文学科主任を、そして2007年から2年間文学部長、そして2017年から1年間キャリアセンター長を歴任された。植野先生が大学で初めて教鞭をとられたのが1977年、実践女子大学に着任されたの

が1987年、大学の教員として勤められた年数は実に40年以上ということになる。大学で初めて教えられた1970年代や実践女子大学に着任された1980年代は、18歳人口の多さから大学にとっては非常に安定した時代だったと想像する。それに対して2000年代に入ると、学生募集の点でも厳しさが増す時代になり、大学は様々な改革を迫られるようになってきた。植野先生が実践女子大学でいくつもの役職を歴任された時代とは、大学にとってそのような厳しい時代だったと言える。

このように植野先生は次第に日本の大学が厳しい状況に置かれていく過程でキャリアを積んでいらしゃった。カリキュラムをはじめとして様々な改革を経て、現在こうして英文学科があるのも、厳しい時代を乗り越えてきたからこそであり、そこには主任そして学部長時代の植野先生の多大なご尽力があったと思う。そのような時代に本学の、そして英文学科の教員として、あるいは研究者として、活躍されてきた植野達郎先生に、心から「お疲れさまでした」と申し上げたい。これから大学が歩む道も決してなだらかなものではないだろう。これまで長い年月にわたりキャリアを積まれてきた先輩として、植野先生には英文学科を見守っていただき、時には我々に対して助言もいただきたいと思う。